

同年三月 館山航空隊

同年四月 北海道千歳航空隊

同年七月 北海道美幌航空隊

同年十月 北千島占守島五百五

十三航空隊

昭和二十年十月 ソ連軍指揮下に入る

ソ連ナホトカ港着

スーチャンにて伐採

労働

帰国 昭和二十二年五月 ナホトカ經由舞鶴

上陸、復員。

帰国後 現住所にて夫婦と長男夫婦、孫二人同

居とともに鮮魚商及び雜貨店を経営し

ていたが、目下息子夫婦に経営を任せ

ている。親切な良いおじいさんであ

る。子供三人、孫五人は別居である。

(栃木県 野沢 芳夫)

手記

千葉県 綾部 浩

私は、昭和十六（一九四一）年十二月一日に、東部第十七部隊（輜重隊）に入隊し、翌年二月にその部隊は出発、外地に向かった。私達はどこに行くのか一切知らされていなかったが、北支方面ではないかという噂はあった。着いた部隊は、北支那方面軍第三十二師団楓第四二六〇部隊の第二中隊第四内務班に配属された。

そのうちに部隊の一部は南方方面に移動を開始し、東部ニューギニア島に上陸したとの話が伝わって来た。

私は関東軍隷下の部隊編成のために、その要員として下士官十人が残されたその一人であった。そのとき、現地召集で約五十万人が集められ、国境のノモンハンに集結した。しかし敗戦時の昭和

二十年八月には、ノモンハンには約二十万ぐらの兵力であった。ソ連の参戦には何ら戦鬪らしいこともなく、そのノモンハンで敗戦を迎えた。

幾日か過ぎた日、私達は列車に乗せられ、着いたところはハルビンであった。

そのハルビンで私達の部隊は武装解除された。

何か私の胸には、精銳を誇った関東軍も遂に終わりにかと思う淋しい気持ちと、これで故郷に帰ることができるといふ複雑な気持ちでいっぱいであつた。

幾日過ぎたことであろうか、私達はハルビンから列車に乗せられた。列車は一路北に向かつて走る。どこを通つたことだろうか、今考えると、孫呉を通過し黒河で下車させられたのではないかと思う。黒龍江の沿岸に船が待つていた。その船に乗せられ対岸のソ連領に入った。

そのとき何か不安にかられた。それは、このまま帰れるかどうか、しかし今何を考えても無駄だと。言われるままにまた貨車に乗せられた。

列車は走り続ける。どこをどう走っているのか全然分らない。しかし食料は満州から積載した缶詰、米等があつたので心配はなかつた。途中駅で二時間くらい停車するので、その間に飯を炊いたりして食べたので、空腹は感じなかつた。

列車は十五日間くらい走り続け、ウラル山脈をぐるり回り着いたところがクラスノヤルスクという大きな町であつた。この町はモスクワに次ぐ大きな町とのことであり、ビル等が建ち並び、本当に大きな町だと思つた。その町から二キロメートルくらいのところに第一、第二、第三収容所ができていた。私は第三収容所に入れられた。これはすぐには帰れないぞと内心は思つた。この収容所はどうもソ連の軍隊の兵舎か、あるいはほかに捕虜を収容していた跡ではないかと考えられた。割合に整然として、収容所の道路の中央には樹が植えられ感じがよかつたが、外柵は板塀で五メートルくらい、手前には有刺鉄線が張りめぐらされていて、四隅の望楼には銃を持った兵隊が四六時中

警備に当たっていた。これにはあまり感じ良くは思わなかった。

収容所の食事は移動時より悪くなった。粥と黒パン二百グラムくらいとスープ、この食料で働かされて、それでノルマを厳しく課せられてはたまらない。栄養失調が次第に増えていった。私も栄養失調になり、軽い目眩がして困った。作業は、飛行場が近くにあり、そこで飛行機の修理をしたが、私は素人で何も分からず、見よう見まねでなるべく体を使わずに作業した。その甲斐あつてか体の方は徐々に回復していった。

そのほか作業はスチーム等のパイプを通す穴掘り作業もあつたが、私はその作業には従事しなかった。

作業に出るときは現場の監督が迎えに来るのだが、五人ずつの縦隊にして五人、十人と数えている。なかなか計算ができない。朝のいつときはその数える時間に費やされた。

一年間くらい飛行機整備作業をさせられ、次に

私は煉瓦積みの作業をさせられた。これもノルマがあつたが、二年目に入るとすべてが緩やかになつていった。警備兵もだんだんといなくなつていった。煉瓦積み建築も馴れてノルマも予定以上に遂行していった。金も貰えるようになった。

煉瓦積みの作業場にはソ連の女の人達が徴用されて四、五人くらいいた。その人達と一緒に作業したが、人種が異なつても男と女、何か明るい感じで働くことができた。

共産主義を教育された日本人の連中が大分宣撫員として収容所内にいたが、余り耳を貸す人もなく、とにかく大勢の人達がいるので、その成果は皆無と言つてもよかつた。

だんだんとすべてが緩やかになつてきて、外出を一人でもできるようになつた。ある日のこと、ソ連の監督が来て「今日は町に出よう」と誘つてくれた。その頃は金も相当持つていたし、その監督につき合うことにした。私のほかに二人同行し、監督と一緒に歩いて町に出た。立派な町で店

が建ち並び、主に食料品店が多かった。そのほか衣類の店も並んでいる。この町はいわゆる官庁街であるとのことであった。監督はふと一軒の店に入った。私達も一緒に入った。そこはキャバレー街だった。私は田舎育ち、日本にいてもキャバレーなんて入ったことはなく、びっくりして中を見回した。中は薄暗い、ドレスを着た若い女の人達が四、五十人いるようだった。

しかし何か落ちつかない。監督の言われるままに椅子に腰を下ろした。注文は監督がしてくれた。女の人達も私達を見て驚いたのではないかと思つた。酒を飲み、何か分からない物を食べた。そして、その勘定は各人で払えとのことだったので払つたが、幾ら払つたか思い出せない。監督の言うのには、このキャバレーは中流以上の人達でなければ入れないと説明してくれた。

冬は非常に寒かつた。零下四五度から六〇度くらいまで下がることもあつた。だが五〇度になると作業はさせなかつた。

またこの寒さを越さなければならぬかと思つた。それが昭和二十三年十月、そして喜びいっぱい舞鶴の土を踏んだのは十月十四日であつた。

我が思い出の記

千葉県 伊藤 千次

シベリア抑留生活第一歩

ウラジオストクを出港してより十日目、昭和二十一年（一九四六）年一月十七日朝、左舷に雪を被つた山々が見え、氷の大海原に船は止まつていた。船倉までニュースが伝わり、船内は大騒ぎである。十日前までは内地帰還の夢があつたが皆の心配が本当になつた。皆、上甲板に上がつて来た。朝の太陽が氷原をギラギラと照らしてまぶしい。一番に歩哨が氷原に四、五人降りる。次に板切れが落とされて驚いたことには焚き火を始め